

骨董屋の喫茶店——ここから夕方が始まる

このところ頻繁に出入りしている「パティオ十番」の広場に面したビルの二階にある喫茶店のことを書かねばなるまい。麻布十番に十軒あまりある骨董屋の一つで、そこで骨董品の販売を行うかたわら、骨董の陶器や磁器や塗り物を使ってコーヒーや「御薄」を飲ましている。「御薄」に甘い物が付くのは普通だけれど、ここではコーヒーを頼むと煎餅が付いてくる。それもザラメをまぶした甘い煎餅である。最近は顔見知りになって、僕たちが集まって話し込んでいると、黙ってコーヒーのお代わりとか、口直しにと緑茶を持ってきてくれる。

「やっぱり一回ごとに豆を挽いて出すコーヒーは美味しいね。コーヒーの香りは良いし、味も良い。こうでなくっちゃ——」

「これだけ来るんだから、お代わりぐらいサービスしてくれなくちゃ——」

「そうね。じゃ、これから三回来てくれたらコーヒー一杯をサービスするわ」

「そっちより、こっちの器の方が大きくて、コーヒーがたくさん入っている。気持ちが出ているね——！」

「まあ、そんなことないですよ。おなじですよ本当に」

こんなたわいない、身勝手な軽口を店の女主人と叩く。厳密に言うと雇われ女主人だそうだ。そしてオーナーも女性だそうだ。

「オーナーって、どんな人？ 美人？」

「趣味でしょう。こんな店をやっているから——」

中年男たちのストレートな質問に、どう応えたら良いものか戸惑っている。戸惑っているのを見て、楽しんでいる。

「さあ、どうかしら——」

「誤魔化しているな——。うん、きっと良い女に違いない」

先日、鯛焼き五匹を「浪花屋」で買い、それを持って店に行った。オーナーが顔を出すという曜日を聞いていたもので、二匹を男三人で分け、三匹を、いつもいる二人とオーナーのためのお土産にと思ってだ。ところが、いつもいる女主人の顔が見えない。代わりに初めて見る女性から丁寧にお礼を言われた上に、コーヒーのおわりをサービスしてもらった。口振りもそうだったし、想像していたイメージにも合っていた。確認したら、やはり店のオーナーだった。

「いつもご贖^{ひん}にして頂き有り難うございます。コーヒーなくなったら言ってお下さい。サービスさせて頂きます」

と、丁寧に言われ、要求もしないのにコーヒーをサービスされ、恐縮してしまった。こりゃあ、なんと言っても費用対効果は抜群だと思った。

「鯛焼きでこんなにサービスしてくれるなら、この方がとくだな——。じゃあ、今度は狸煎餅^{たぬきせんべい}でも持ってこよう」

思うとすぐに口に出てしまうのが、中年男の嫌らしさである。それが分かっているが、口にするのだからなおさら始末に悪い。

友人の作家・杉田望^{すぎたのぞむ}、大学一年からの友人の浅井隆士、それと僕。この三人が、ここで待ち合わせて、それから夕飯に出かけることが最近は多い。この店の閉店時間が六時半なのも都合がいい。ちよつとワイワイやれば十分で、それ以上は本音を言えば、下心も何もかもがないからだ。

もう、お互い、いろいろやってきたし、さすがに定年も近い年になって肩から力が抜けてきたからだろう。それでも三人一緒になると、女性に負けず劣らずなかなか賑^{にぎ}やかである。普段、女性と口をきく機会が少ないものだから、誰もが何だかんだと話しかける。それに、いちいち応対していれば、仕事が滞^{とど}るのには目に見えて

いる。困惑している様子が分かっていながら、厚かましく雇われの女主人を引き留める。最近は、少しは付き合わなければ収まらないだろう、と諦めて^{あきら}いるようではあるのだけれど……。

「先日、バスで一緒になったけれど、自宅はあっちのほう？」

「軽井沢へゴルフに行ったというけれど、いったい誰と行ったの？」

「平日ゴルフなんて良い身分だな——。パトロン？」

「で、スコアは？」

「アメリカにいる娘さんに会いに行っていたんだって？」

「娘さんは留学していたんですって。それでアメリカで就職したとなると、もう向こうの男と一緒にあって、日本には帰ってこないよ」

プライベートもへったくれもない。とくに何かを期待しているわけではないだけに、余計に遠慮^{えんりよえしやく}会釈なく質問責めにする。コーヒーなどを運んでくるのだから、どうしても一度は捕まってしまう。いろいろな骨董品^{こっとうひん}が並んでいる戸棚の陰になっているカウンターの奥が彼女の定席だけれど、なかなかそこには戻らせない。

女主人がやっとの思いで抜け出すと第二幕が始まる。しばらくは浅井の話の聞かなければならぬ。まずは自分の頭の中にあることを吐き出さないことには済まない性分^{せいぶん}だからだ。「三十分は黙って聞く。これがつき合い方の極意だよ」と杉田は大発見でもしたように嬉しそうに言う。

でも、これは十八歳の時からそうで、大学で四年間も一緒だった僕にすればどうということはない。浅井は大手企業を早期退職して、悠々^{ゆうゆう}自適^{じてき}の生活をしている。それで、しばらく潜んでいたものが表に出てきたに過ぎない。

浅井は独身を通して、いまや同世代の男性の羨望的である。それを言うところであつたりまえだ。こうなることは分かっていた。でも、それで犠牲にしてきたこ

ともたくさんあるんだ」と逆襲される。続いて「そろそろ命の洗濯にでも行くか」とやられたら、ぐうの音も出ない。彼は、勤めていた時代から、少なくとも年二回は、やれモルジブだ、フィージーだ、パラオだ、と赤道付近の島に出掛けていた。「じゃなきや、やってなんていられるか」これが浅井の口癖で、今でも少なくとも年に一回は、どこか南の島に出かけている。

しかし、浅井がどう頑張っても第二幕は六時半で打ち止めになる。この店の閉店時間だからだ。それが、ここを集合場所にするメリットの一つである。「さあ、今日はどこにするか」こう三人の誰かが切り出す。といって、そんなに選択肢が多いわけでもない。

• いった行っても空いていて、これで潰れずにやっていけるのかと心配になる、飲茶が安く楽しめる中華料理屋

• 「東京民生食堂」という米の配給制度が華やかな時代の鑑札をまだ飾っている、気さくな雰囲気と、それに何よりも安くて旨いのがいい「ふじや食堂」（杉田と浅井は、酒を頼むと、コップになみなみと注ぎ、受け皿代わりの升にいったいこぼしてくれる、その娘が気に入っているらしい）

• 浅井は味が薄くてあまり好きではないというけれどコスト・パフォーマンスのいい、路地の奥の突き当たりにある広島焼き屋

• 老夫婦がやっている、豚シヤブが旨くて、それに豚カツにしるメンチカツにしるボリユームたっぷりで、キャベツ山盛りの豚カツ屋

• 用意されている酒の種類が物足りないけれど、山芋サラダ、自家製薩摩揚げ、冬場ならば鍋料理など食べ物は安くて旨い鳥居坂下の居酒屋「こま」

• ちよつと気張れば、煮物や焼き物などが旨いし、酒の種類も多く、和服に白い割烹着姿が似合う沢たまき風の女将が仕切っている小料理屋

• スタミナ不足といえ、それこそ麻布十番にはたくさんある焼き肉屋

選択肢は、だいたいこのあたりに落ち着いてしまう。浅井はイタメシが好きなよ
うで、「どう、スパゲッティは？」などとときどき呟くけれど、杉田も僕も、なか



なか首を縦に振らない。それで三人でイタメシというのは、まだ一度も実現していない。「蕎麦屋で一杯というのもいいな——」誰とはなく、こういう粋がった台詞も出てくる。でも、「野菜が足りないな——」などという現実的な声で否定されて、実現しない。手羽とかレバーとかモツの煮込みなどが旨い焼鳥屋もあるが、これも「バリエーションが不足だな——」という意見で、選に漏れてしまうことが多い。

三人ともが、だんだんと「いしよくどうげん 医食同源」を意識するようになっていく。昔のようにコツテリとしたものを避け、できるだけ野菜、それも煮野菜とか根菜を意識的にとり、肉よりも魚にするという具合に食生活が変わってきている。

昔は、寒いときや風邪気味るときは、トリの腹に朝鮮人参やナツメや米を詰めて、グツグツ煮込んだ「サンゲタン」を売り物にする韓国料理屋によく行った。



でも、最近は寄せ鍋こに凝っている。具たくさんで最後にご飯を入れて作る雑炊が良い。三千円で、三人で分けて食べて十分の量がある。それに六百五十円の特製の山芋サラダ、これも三人で分ける。こんな嬉しい小料理屋「こま」が「麻布十番温泉」の斜向かい、鳥居坂下にある。週に三回も顔を出すこともある。「いくらなんでも三回は」と躊躇ちゅうちよしたけれど、寒くなると、この安さと旨さの魅力にはなかなか逆らいがたい。

「あいつの墓、どこにあるのだろう」

「甲子園だろう。地元だったし——」

大学時代の友人の話である。最近、とくに鍋を囲んでいると話題に出てくる人が多い。お互い年をとったのだろう。Nとは、四年間一緒に、よく遊んだ。渋るのを連れ出し、リュックサックを背負わせ、山登りもさせた。へばって頂上近くで頑がんとして動こうとしない。「どうせ登って、また降りるのだから俺はここで待つ」と言っ
てきかない。それを無理矢理に引っ張って登った。そのNは四十歳に達する前、肺ガンで亡くなった。「やっぱり生命力が弱かったのかな——」と思う。

北海道を一緒に一回りした気の優しいヤツ——タバコも飲まなければ酒もやらないし、健康のためだと毎日ジョギングを欠かさなかった。このIは、それなのに、あつという間に胃ガンで逝ってしまった。大手コンピュータ・メーカーでハードディスクの開発を専門にやっていた。亡くなったのは四十代半ばだった。

学生時代は優秀だったけれど、目移りが激しく、何でも途中で放り投げる性癖があつて、卒業してからというもの、なかなか仕事が上手く行かず、昨年、ついに自殺してしまったヤツもいる。「また一緒にやりたい」と電話があつたが、もう何回も痛い目に会っていたため、若い頃ならともかく、この年になるといい加減なことは許されない。「仕事だけは一緒にやれない」と断った。このWが自殺したと聞いたのは、それから一週間ぐらい後のことだった。

学生時代から、体までも斜に構えてヨタっていたHも、持病の喘息ぜんそくが酷ひどくなって、もう淡々と人生を流していると自嘲気味に電話してくる。真面目だったKは、大手メーカーに就職したものの、仕事に行き詰まって悩んでいるらしい。

先日も、知り合いの女性が乳ガンで手術したが、その後、あっちこっちに転移してもう危ない状態にある——そう人づてに聞いたと、浅井がポツリと呟つぶやいた。両親とも健在で長寿の系統だから、「俺は九十歳ぐらいまで生きるだろう」と言い続けてきたのに、「俺はおまえと違って、病気の苦勞をしたことがないけれど、これからするのだろうな——」と弱音を漏もらすようになった。

行革はいったいどうなっているだ。なんだ大蔵省の連中はとか、隠居よろしく悲憤慷慨しながら賑やかにやっている時に、誰からともなく、フツと、こんな話が出てくるようになってる。

目を上げると、店は満員である。「安くて旨いといっぱいになる。人間やつぱり正直だよ」思わず異口同音に飛び出した言葉に、鍋を片づけに来た女将が嬉しそうに顔を笑した。そろそろお茶を飲んで、お開きにする時間である。今なら飲み仲間の高成田享が出演する「ニュースステーション」が見られる。間もなく交代するし、今日ぐらいは、最初からきちんと見ようということになった。

という次第で、「ごちそうさま——」と言って、湯気で曇ったガラス戸をあけて外へ出た。「毎度あり——！」の聲が冷たい夜気に響いた。足元の歩道では風に吹かれて集まってきた街路樹の落葉が音を立てていた。明かりに惹かれて「麻布十番温泉」に目を向けたら、洗面器を片手に湯上がりの人が気持ちよさそうな顔をして出てきた。

東京の町のもっとも典型的な形というのは国電ないし私鉄の駅がまず中心にあり、そのまわりに商店街が出来ている鉄道中心の町だ。新宿も渋谷も下北沢も、亀戸も小岩も、みんなそうである。

しかし麻布の町はちがう。地下鉄の広尾と六本木の駅はあるにはあるが、町は鉄道中心に開けたところではない。町には中心がない。だからこの町を歩いていると迷路にまよいこんだようにもなるし、時間が過去のままとまったようにも感じる。…………

麻布は町というよりも、東京オリンピック以後、風景を一変させてしまった周囲に取り残された秘密の花園ようである。…………その花園の一つが、商店街で名の通る麻布十番である。地下鉄の駅からもかなり離れた地点に、突然花が開いたように賑やかな商店街が存在する。…………（「江戸東京物語——山の手編」新潮社編）